

コミュニケーションの主体

— アダム・スミスの場合 (4) —

妹 尾 剛 光

スミスが「道徳感情論」で尋ねたのは、道徳感情として「正しいものは何であるか」ということではなくて、道徳感情の「事実は何であるか」ということであった(2,1,5. p.167.)。しかし、道徳哲学での問題は、一、徳 *virtue* とは何であるか、ということと、二、その徳であるものを正しいとし、徳でないものを正しくないとするのは、人間の中のどのような力であるか、ということである (6,1. pp.414~415.)、とスミスが書いたとき、第一の問題は具体的な状況の中での善と悪についてのわれわれの考えに影響を及ぼす、實際上重要な問題であった (6,3, *Introduction*. p.491.)。

徳というものが人間の価値判断を基軸にして成り立つものである以上、それが何であるかを探ることは、同時に、それを探る人間自身のありかたを探ることである。

しかも、道徳哲学が問題としている領域は、どの人間もが少なくともある程度は知っている、自分の中のことであって、全く事実でないものは、誰も事実だとは認めない領域である (6,2,4. pp.487~489.) から、スミスは「道徳感情論」でスミス自身の体験とくいちがうことを事実として書くことはなかったと考えられる。

小論は、この「道徳感情論」に見ることができスミス自身のコミュニケーションの主体としてのありかたを探ろうとしたものである。

「道徳感情論」はスミスの生存中6度版を変えており(初版 1759年, 2版 1761年, 3版 1767年, 4版 1774年, 5版 1781年, 6版 1790年), そのうち内容の上で重要な追加, 修正は, 2版と6版とでされている。ここでは, 次の諸版本, 注釈書を参照し, 引用文などの該当箇所は, Edition (但し, 初版は略): Part, Section, *Chapter*. Page. の順に数字で示した。引用文中 () 内は引用者。

1. The Theory of Moral Sentiments. London: Printed for A. Millar, in the Strand; And A. Kincaid and J. Bell, in Edinburgh, 1759.

2. The Theory of Moral Sentiments, To which is added A Dissertation on the Origin of Languages. The Third Edition. London: Printed for A. Millar, Kincaid and J. Bell in Edinburgh; And sold by T. Cadell in the Strand, 1767. (2版での変更は, 4を参照した上で, これによった。)

3. The Theory of Moral Sentiments : or, An Essay towards an Analysis of the Principles by which Men naturally judge concerning the Conduct and Character, first of their Neighbours, and afterwards of themselves. To which is added, A Dissertation on the Origin of Languages. London : Henry G. Bohn, York Street, Covent Garden, 1853. (Reprinted by Augustus M. Kelley, New York, 1966.)

4. Theorie der Ethischen Gefühle oder Versuch einer Analyse der Prinzipien, mittels welcher die Menschen naturgemäß zunächst das Verhalten und den Charakter ihrer Nächsten und sodann auch ihr eigenes Verhalten und ihren eigenen Charakter beurteilen, Nach der Auflage letzter Hand übersetzt und mit Einleitung, Anmerkungen und Registern, herausgegeben von Dr. Walther Eckstein. 2Bde. Der Philosophischen Bibliothek, Bd. 200a, b. Leipzig : Verlag von Felix Meiner, 1926.

I

スミスは、人間には根源的な力として自分の利益をどこまでも追い求める自己愛 self-love があるし (2, 2, 3. p. 191.), 同時に、自己愛とは全く異質な力として「人間に、自分以外の人間の運命に関心を持たせ、自分以外の人間の幸福を自分にとって必要なものとさせるという、そこから得られるものが、その幸せな姿を見るという喜び以外の何物でもないとしても、人間をそのようにさせる何かある根源的な力」(1, 1. p. 1.) があると考えている (6, 3, 1. pp. 496~497.)。この後者の力は、それが根源的な力であるために、人間が理性の力で作りだせるものではなくて、人間の意識以前のところから働く、人間に自然な働きであるし (1, 2, 2. pp. 24~26. cf. 1, 4, 1. p. 102. p. 106.), 人間である以上どんな人間にも働く力であって (1, 1. p. 2.), その人間を単なる物ではない自分以外の人間とのコミュニケーションへと動かす働きの土台となるものである (6, 3, 3. p. 520.)。スミスはこの力、この働きを共感 sympathy, fellow-feeling と呼んでいる (1, 1. p. 6.)。

人間はそれぞれが独自の体験をうけて生きているものであるから、自分以外の人間がうけている体験を自分がそのまま体験することはできない。自分以外の人間が何を感じているかは、人間が自分の体験をもとにして、想像力 imagination を働かせてわかることであって、「自分の想像力が写しとるのは、自分の感覚がうけとる印象だけであって、相手の人間の感覚がうけとる印象ではない」(1, 1. p. 2. cf. 1, 2, 2. p. 24. pp. 28~29.)。しかし、それぞれの人間の独自の体験の中にすべての人間に共通な体験があるから、人間はこうして自分の想像力の中で、相手の人間が置かれている状況に身を置いてみることで(客観的状況だけではない、その人間、性格、職業などとりかえる (6, 3, 1. pp. 496~497.)), 「程度は弱いけれども、相手の人間が感じていることに全く似ていなくはない何かを感じる」(1, 1. p. 3.)。これが共感である。

共感とは、具体的なさまざまな状況の中で個々の具体的な人間に向けられるものであるけれども、その底には、自分とは何の関係もない人間に対して「相手の人間が自分と同じ人間であると

いうだけで、どの人間に対しても持つ、広く人間への共感 general fellow-feeling」(2,2,3. p. 199.)がある。

人間は自分以外の人間に自分の感情への共感を見れば喜びをうけるし、自分の感情への反感を見れば苦しみをうける。また、自分以外の人間に共感できれば喜びをうけるし、共感できなければ苦しみをうける(1,2,1. pp.14~21.)。

しかし、共感は一瞬のものであるし、相手の人間の感情の激しさには及ばないものである(1,2,3. p. 36. cf. 1,4,1. pp. 98~99.)。自分と特別の関係のない人間への共感、自己愛と比べればあまりにも弱く(2,2,3. p. 191.)、人間は敵に対しては共感を持たないものである(1,3,3. p. 73.)。それぞれの人間にそれぞれに十分な悲しみを負わせられた創造主は、人間が自分以外の人間の悲しみには、その悲しみを現実に取り去るのに必要な以上の共感を持たなくてもよいと考えられたのだ、とスミスは考えている(1,4,1. p. 102.)。2版では更に、人間が自分にはどうすることもできない自分以外の人間の運命に共感しないようにつくられているということは、賢明な神の知恵であり、よいことである、と書き加えている(2版;3,2.)。

II

自分以外の人間の感情と、共感によってうみだされた自分の感情とが完全に一致するとき、人間は相手の人間の感情を、その感情をひきおこした対象に適切な感情だと考え、よしとする。相手の人間の感情と、共感によってうみだされた自分の感情とが一致しないとき、その一致しない程度に応じて、相手の人間の感情を、その感情をひきおこした対象に対して適切でない感情だと考え、よくないとする(1,2,2. pp. 22~23.)。

感情をひきおこすもとなった対象が、自分にも相手の人間にも特別の利害関係がないものであるとき、即ち、自分と相手の人間との間に利害が対立していないとき、二人は同じ立場からその対象を見ているので、共感が働かなくても、その対象についての感情の完全な一致をうみだすことができる(1,2,3. pp. 30~31. p. 35.)。そこで「相手の感情がわれわれの感情と一致するだけでなく、われわれの感情を教え導くとき、……われわれはそれをよしとするだけでなく、その非凡な、思ってもいなかった鋭さと広さに驚きもし、びっくりもするし、相手の人間は非常に高度の感嘆と称賛をうけて当然だと思われる。」(1,2,3. pp. 31~32.) 知性の徳 intellectual virtues と呼ばれているものに与えられる称賛の多くはこれに基づくものである(1,2,3. p. 33.)。「徳とは抜きんできた良さであり、普通には見られないほどに偉大な、美しいものであり、普通どこにでもあるものをはるかに上まわるものである。」(1,2,4. p. 45.)

しかし、感情をひきおこすもとなった対象が自分と相手の人間とのどちらかに特別の利害関係があるものであるとき、即ち、二人の利害が対立しているとき——これが、人間の知性だけが働けばよいときとは区別される、本来の道徳的な領域である(1,2,4. pp. 44~45.)——、二人はちがう立場からその対象を見ているので、その対象についての二人の最初の感情はばらばらであり、

感情の一致はありえない。そこで二人の間に感情の少なくともある程度の一致をうみだすためには、二人がたがいに想像の中で、できるかぎり相手の立場に身を置いて相手の人間の感情を見つめ、利害に影響を受けていない人間（観察者 the spectator）は、相手の人間が投げこまれた状況をできるかぎりくわしく想像して、相手の人間の感情の激しさについてゆこうとし、利害に強く影響を受けた人間（当事者 the person principally concerned）は、相手の人間の冷静な状況をできるだけはっきりと想像して、利害とは関係のない人間にもついてゆける程度に、自分の感情の激しさを抑えなければならない。こうして利害が対立している人間同志の感情は、たがいに相手の人間に共感を持つことを通して歩みより、社会の調和に十分な程度の、感情の一致をうみだすことができる（1,2,3. pp. 34～39.）。そのとき二人の感情は「同音では決していないだろうが、協和音ではありうる」（1,2,3. p. 38.）。スミスはこのとき「それが求められ、必要とされていることのすべてである」（1,2,3. p. 38.）と考えている。それ以上のことを相手の人間に求めるということは、人間として当然に負わなければならない以上のことを相手の人間に負わせようとすることであり、そのことによって自分と相手の人間との間にコミュニケーションがうまれる基盤である、たがいに共感をもちあうということもなくしてしまうことである。

このときの二人の人間のそれぞれの努力に基づいて二つの徳がうみだされる、とスミスは考えている。平静な観察者が当事者の感情についてゆこうとする努力が普通に見られる程度を越えてはるかに非凡なものであるとき、それは愛すべき徳 the amiable virtues, 寛大なやさしさの徳 the virtues of indulgent humanity であり、自分の利害に強くかかわる状況に置かれた当事者が、観察者の感情についてゆこうとする努力が普通に見られる程度を越えてはるかに非凡なものであるとき、それは尊敬すべき徳 the respectable virtues, 自己抑制の徳 the virtues of self-command である（1,2,4. p. 41. pp. 44～45.）。「だから、自分以外の人間に多く共感し、自分自身に共感しないということ、自分中心の感情を抑え、やさしさの感情を自由に働かせるということが、人間の自然の完成されたありかたである。そのことだけが、人間の中に、あの、美德と適切さとのすべてがあるところ、つまり、感情や情念の調和をうみだすことができる。」（1,2,4. pp. 43～44.）。

やさしさの徳が、観察者の立場に立つことからうまれる共感のほかに、相手の人間に積極的によいことをしようとする意図が働いてうまれると考えられるように、自己抑制は、自分中心の利己心とは異質な、共感を基底にしてうみだされてくる働きである（cf. 「自分以外の人間の感情に対するわれわれの感受性は、自己抑制の男らしさと矛盾するところではない、その男らしさが土台としている原動力そのものである。われわれの隣人が不幸のときには、その悲しみに同情させる同じ原動力あるいは本能そのものが、自分が不幸のときには、自分自身の悲しみの浅ましく、みじめな嘆きを抑えさせる。隣人が富み榮え、成功しているときには、その喜びを祝わせる同じ原動力あるいは本能そのものが、自分が富み榮え、成功しているときには、自分自身の喜びの軽々しさや節度のなさを抑えさせる。」（6版；3,3. pp. 213～214.））と同時に、それは自分の中にある自然な情念を冷静で公正な観察者がついてゆけるところまで抑え

る働きであり、人間のなまの自然にはない、基本的には「公正な観察者」the impartial spectator が人間の中にうまれてくることに支えられてうまれてくる、共感とは異質な働きである (cf. 「しかし、賢明さ prudence, 正義 justice, 積極的な愛 beneficence といった徳は、さまざまな場合にほとんど同じ大きさの力で、(人間の自然な感情と、人間の中に住むと考えられた公正な観察者の感情に心を向けることという)二つのちがう原動力によってわれわれに勧められるとしても、自己抑制の徳は、ほとんどの場合主としてまたほとんど完全に、たった一つの原動力によって、即ち、適切だという感覚によって、人間の中に住むと考えられた公正な観察者の感情に心を向けるということによって、われわれに勧められる。」(6版; 6, Conclusion. p. 386. cf. 6版; 3, 3. p. 203.)). 初版では Part I. の冒頭で独立した一つの Section であった「Section I. 共感について」が、2版では初版の Section II. を構成していた4つの Chapters とともに「Section I. 適切だという感覚について」の中に入れられて、その Chapter I. の位置に置かれたということは、少なくとも「共感について」に書いたことだけを道徳感情論の基本的な原理とすることは適切でない、更に言えば、新しい Section I. の5つの Chapters 全体の中に基本的な原理がある、とスミスが考えたからではないかと思われる。

こうして、利害がちがう人間の中に共感と自己抑制とが働いて、二人の感情が一致するとき、人間が一人の人間であるかぎり、二人のもとの感情は自然な感情である (e.g. 1, 2, 3. p. 36. 1, 3, 2. pp. 60~61.) と同時に、人間が自分以外の人間との結びつきの中で生活している人間であるかぎり、自己抑制を受けて変った新しい感情は、適切な感情であるし自然な感情である (e.g. 3, 1. p. 249. p. 260. 6, 1. pp. 413~414.)。自然で根源的な感情を持つ人間同志が出会うときに、それぞれの人間は相手の人間にどんなことをしても打ち壊すことができない人間の核のようなものが、肉体が滅びるときにも肉体とともに滅びることがないものとしてあるということ、自分の中に「公正な観察者」がうまれることを通して、たがいに相手の人間に認めあうということが、人間にとって自然だからである。

自然であり、適切である感情の程度は、具体的な状況によってさまざまである。しかし、スミスによれば、一般に、肉体のある状態あるいは傾向からうまれてくる感情(飢え、性欲、肉体の痛みなど)、想像力からうまれてくる感情でも、その個人の特殊な性向や習慣に基づく感情(ある特定の男女間の愛着、自分の友人、研究、職業にかかわるものなど)、および非社会的感情(憎しみ、怒りなど)は共感を持ちにくい感情であり、社会的感情(寛大、やさしさ、親切、同情、友情、尊敬など)は共感を持ちやすい感情であり、自愛感情(自分の個人的な運、不運によっておこる悲しみや喜びなど)はその中間の感情である (1, 3, 1~5. pp. 49~92.)。

III

スミスによれば、適切な感情に支えられている上に、相手の人間に積極的によいことをしようとする意図が働いてうまれる行為は、「公正な観察者」から見て、よいところ merit がある、よい報い reward を受けて当然と感ぜられる行為であり、適切でない感情に支えられている上に、

相手の人間に積極的に悪いことをしようとする意図が働いてうまれる行為は、悪いところ *demerit* がある、悪い報い即ち罰 *punishment* を受けて当然と感ぜられる行為である (2, 1, 1~5. pp. 141~169.)。意図の対象であり、行為の結果が及ぶ相手は、基本的には一人の人間である (6版では、社会もまたその対象となりうることが示されている (6版; 6, 2, 1~3. pp. 319~348.) cf. 小論 IV)。その行為によってよい結果、悪い結果をうけた相手の人間は、自分がうけたことに応じて、最初の人間に対して現実の行為を返すのが自然である。だからここでの意図は、少なくともその結果として、その人間を自分以外の人間との具体的な関係に巻きこむことになる、相手の人間に積極的によいことを、あるいは悪いことをしようとする意図である。

しかし、結果は必ずしも意図と同じではない。結果が意図とちがうとき、それはその人間にはどうすることもできない偶然が働いたのであり、その人間がその結果にどれだけ責任を感じたとしても、その責任を負い尽すことはできないけれども、現実には結果が人間の判断に影響を与えるし、そのことの中に、この世をそのようにつくった神のよき意図を見ることさえできる、と *スミス* は考えている。意図が悪いということだけで罰せられるならば、人間のどんな行為も安全ではないだろうし、意図がよいということだけでは、現実により結果をうみだすことはできないし、悪い意図がなくても悪い結果は相手の人間を同じように傷つける。6版では、意図せずに自分以外の人間の幸福を侵せば、その侵した幸福の大きさに応じて、何らかのつぐないをしなければ気がすまないように人間をつくることによって、神は人間の幸福を神聖なものとして守られている、と書き加えられている (6版; 2, 3, 3. p. 155.)。しかし、意図とちがう結果のために、意図だけを見れば当然うけてよい、よい報いをうけず、あるいは、うけるはずがない罰をうけた人間が最後に頼るところは、自分の感情と意図である (2, 3, 1~3. pp. 207~244.)。責任あるものとは、*スミス* によれば、自分の行為をまず神に、次に自分と同じ人間に説明しなければならないものことである (3, 2. p. 257.)。

自分以外の人間にとってよいことを人間に積極的にさせるものは積極的な愛 *beneficence* であり、自分以外の人間にとって悪いことを人間に積極的にさせるものは不正 *injustice* である。不正を行わず、自分以外の人間を傷つけないということは正義 *justice* である (2, 2, 1. pp. 170~180.)。

積極的な愛は、人間の徳の中でも一番すぐれた徳であり、それを大きく働かせたときには、よい報いの最高のものをうけて当然な徳であるけれども、人間の全く自発的な感情に基づくものであって、力づくで相手の人間から奪いとることができないものである (2, 2, 1. p. 170. p. 178. 6, 2, 3. pp. 463~464.)。

しかし正義は、「それを侵せば、よくないとされて当然な動機から、ある特定の個人に、現実の、はっきりとした傷を与える」(2, 2, 1. p. 173.) のであり、その具体的な内容は、その神聖さの順に、第一に、人間の生命を守ること、第二に、人間が既に持っているものを守ること、第三に、個人に属する権利、即ち、他の人間との契約によって当然その人間に属するはずのものを守

ること (2,2,2. p.184.) (別のところでは、人間、財産、信用を傷つけないこと、とされている (2,2,1. p.179. 6,2,1. pp.422~423.)) である。それは、人間が日々この世で一人の人間として生活してゆくことに欠くことのできない前提であって、人間はどのような人間でも生きる権利があるから、それはいつも力づくでも守らなければならないものである。6版では、正義を侵すことによって相手の人間がうける傷より、自分のうける利益がはるかに大きいときでも、正義を侵してはならない、と書き加えられている (6版; 3,3. p.195.)。

人間は何もしないでいても多くの場合正義を守ることができるから、それを守ったからといって特別何のよい報いを受けなくても当然である (2,2,1. pp.178~179.)。しかし、それを侵すということは人間の怒りと罰にふさわしい対象であって、「人間は不正によってなされる その傷に復讐するのに使われる暴力についてゆき、それをよしとする」 (2,2,1. p.173.)。

正義の核心は、正義感といった人間の感情にあるのではなくて、そうした感情に支えられた、あるいは、感情がどうであってもそれとはかかわりなしに、現実の人間を傷つけないという現実の行為にあるから、正義は、何の例外も修正も許さない厳密な原則を決めることができるただ一つの徳であるし、そうしてつくられた一般原則への敬虔で、宗教的な配慮を主な動機とするときに、正義が要求する行為は一番適切に行なうことができるし (3,4. pp.307~311.)、正義は力づくで奪いとることができるのである。

正義感は、自分の感情がどうであっても、いつも行為として正義を行なわなければならないと感じる感覚である。それは「相手の人間が自分と同じ人間であるというだけで、どの人間に対しても持つ、広く人間への共感」 (2,2,3. p.199.) に支えられて、自分の中に住む「公正な観察者」が自己愛との絶え間のないたたかひの中で自己抑制を働かせることを通して日々の生活の中になえずうみだされてくる感覚であり、そのことによって、それは人間になえず正義を行なわせることを通して、人間の社会をいつも平和な社会として支えている土台である (2,2,2. pp.180~188. cf. 2,3,2. p.233. 6版; 3,3. p.195.)。人間がコミュニケーションの主体であるということを実感するということは、自分以外の人間がコミュニケーションの主体であるということを実感するということであり、「自分以外の人間に当然に与えられるべきもの」 (2,3,2. p.233.) があるということを実感するということである。

スミスにとって、積極的な愛は一番すぐれた徳であり、それに支えられた社会は「たがいに尽しあうという一つの共通の中心に引き寄せられて」 (2,2,3. p.188.) いる、栄え、幸福な社会であるけれども、そのような社会がなくなったときにも、社会の中でしか生きてゆけないようにつくられている人間は、社会の中で生きつづけ、「同意された価値評価に従って、役立つものを報酬目当てで交換することによって、社会はなお支えることができる」 (2,2,3. p.189.)。そのとき社会を支えているものは正義である。「社会は、……いつも傷つけ、いためあおうとしている人々の間では、生きつづけることができない」 (2,2,3. p.189.) から、積極的な愛は社会の飾りであって、正義が社会の大黒柱である (2,2,3. p.190.)。

スミスが生きた生活は、日々の自分の仕事を営々と繰り返す生活であり、それをスミスは、この世で自分に与えられたただ一つのところとして、自分から引き受けて生きていた。6版で既成宗教への批判を更に強く打ちだしたスミスは、修道院での役に立たない苦行生活をこの世での苦難と危険に満ちた生活より価値多いものとして、修道士には天国が与えられ、それ以外の人間には地獄が与えられると考えることは、人間の道徳感情に確実に反したことでありと書き(6版; 3, 2. pp. 189~190.)、宇宙全体の幸福を構うのは、神の仕事であって、人間の仕事ではない、人間にはその力と知恵の弱さにふさわしく、自分や自分の家族、友人、国の幸福を構うことがその仕事として与えられているのであって、宇宙全体の幸福を考えているということは、この世でのごくわずかな義務を怠ることの言い訳にならないことを、繰り返し書き記している(6版; 6, 2, 3. p. 348. 6版; 7, 2, 1. pp. 427~428.)。同時に、積極的な愛は、営々と営む生活にとっては飾りであるとしても、スミスにとって人間にできることの中で一番価値あるものであることに変わりなかった。

IV

「人間のように不完全な創造物は、その存在を支えるために、自分の外にあるあれほど多くのものが必要だから、(積極的な愛以外の)他の多くの動機から行為しなければならないことが多い。」(6, 2, 3. p. 466.) 自分が生きてゆくのに必要なものを手に入れ、自分の健康と安全を保ち、自分のこの世での生活を最後までつづけてゆくことは、その人間自身のすることである。そのために自分の幸福や利益を配慮する節約、勤勉、分別、注意、思慮の習慣などは、多くの場合よしとされるにふさわしい行為の原理であり(6, 2, 3. p. 464.)、自己愛に従って自分の健康、生命、財産を十分に配慮することをしないということは、一つの欠点と考えられる(6, 2, 3. p. 465. cf. 1, 3, 3. p. 79. 1, 4, 2. pp. 127~128. 2, 2, 2. p. 181. 6版; 6, 2, 1. p. 321.)。6版では、自分の健康、財産、身分と信用を構うことは、賢明さ *prudence* と呼ばれる徳の仕事であることが、はっきりと記された(6版; 6, 1. p. 311.)。

だからスミスは、「富や名誉や高い地位を目指す競争で、(それぞれの個人は)自分の競争相手のすべてに打ち勝つために、できるだけ力を出して走り、あらゆる神経、あらゆる筋肉をできるだけ働かせればよい。」(2, 2, 2. p. 183.) ある程度熱心に野心を働かさない人間は、心の小さい、気の弱い人間と考えられて当然だ(3, 4. pp. 303~304. cf. 6版; 6, 3. p. 358.)と考えている。しかし、正義が侵されれば社会は崩れるから、自己愛の傲慢さを自分以外の人間がついてゆけるところまでさげることが、絶対に必要である。「もしも競争相手の誰かを押し下ろしたり、投げ倒したりすれば、観察者たちが大目に見ていたのは完全に終る。それはフェア・プレーを侵すことであり、観察者たちが許せないことである。この人間(押された人間)は、彼等にとってはあらゆる点で、その人間と同じ人間である。彼等はその人間が、この自分以外の人間よりも自分をこれほど大きく選ぶとるその自己愛の中に入らないし、その人間がこの人間を傷つけた動機についてゆけない。」

(2, 2, 2. p. 183.)

しかし、野心は「一度人間の胸を完全にとらえてしまえば、競争相手も、後継ぎも容れはしない。社会の人々の称賛をうけることに慣れ、あるいはそれを期待することにさえ慣れてしまった者には、それ以外の喜びはすべて衰え、朽ちてしまう。」(1, 4, 2. p. 126.) 富と権力を持つものは、人々の絶え間のない共感を集中して、人間にとって一番欠けたところのない幸福な状態にいると考えられるから、「それが負わせる束縛にもかかわらず、それに伴う自由の喪失にもかかわらず、地位の高さは羨みの対象となって、それを追求めるときに経なければならぬ、あの骨折りのすべて、あの不安のすべて、あの屈辱のすべてを、人間の考えの中で償うのであり、更に重要なことには、それをかちとることによって永遠に失われてしまう、あの自由な時間のすべて、あの気楽さのすべて、あののんきな安全さのすべてを償うのである。」(1, 4, 2. p. 112.)

だから「地位……は、人間の生活の中での骨折りの半分の目的であり、貪欲と野心とがこの世に導き入れた、あらゆる騒動とせわしさと、あらゆる略奪と不正との原因である。」(1, 4, 2. p. 127.) そのとき人間の中に働く虚栄心 *vanity* (1, 4, 2. p. 110.) は、自分に当然に与えられる以上の称賛を求め、尊敬と賛同の感情が沈黙していることに満足せずに、そのやかましい表現を好むものであって (6, 2, 4. pp. 477~478. cf. 6版; 6, 3. pp. 373~380.), 地位のちがいによって称賛の程度がちがうということには根拠のないことが多い (1, 4, 3. p. 128. cf. 1, 4, 2. pp. 117~120. pp. 122~123.) ことをスミスは見ていた。

人間が生きてゆくのにどうしても必要なものはどんな地位の人間でも手に入れることができる (1, 4, 2. pp. 108~109.), 「健康で、借金がなく、心にやましいところのない人間の幸福」(1, 4, 1. p. 97.) はこの世でありうる幸福の最高に近いものであり、しかもそれが「人間の自然で普通の状態」(1, 4, 1. p. 98. cf. 4, 1. pp. 350~351.) であることは、理性と体験が示していることであるから、富と権力が人間にとって一番欠けたところのない幸福な状態であるということは、人間の想像力の偏見であり、自己欺瞞である (1, 4, 2. pp. 112~114. cf. 4, 1. pp. 346~348. 小論V) とスミスは考えていた。

だからスミスは「自分の自由を、宮廷での豪華な隷属と絶対に交換しないで、自由に、何物をも怖れず、独立して生活してゆこうと本気で決意しているのか。その徳にあふれた決意をつづける一つの道、恐らくはたった一つの道があるように思える。あれほどわずかの者しか帰ってこれなかったところには絶対に入るな。絶対に野心の環の中に入るな。自分より先に人類の半分のものの注意を既に奪ってしまった地上の支配者と自分とを絶対に比べるな。」(1, 4, 2. pp. 126~127.) と書いている。

だから、この野心の環の中に入らずに生きようとした人間の哲学としてここ (1, 4, 3. pp. 128~140.) で描かれたストア哲学は、スミスが大きく共感できる哲学であったと考えられる。

6版で、ストア哲学を論じたこの章が削除された代わりに置かれた章でも、スミスは、富ある者、権力ある者に感嘆し、貧しい者、卑しい者を軽視し、軽蔑する人間の中の傾向が、徳よりも

富や権力を選ぶことによって人間の道徳感情を墮落させ、その幸福を破壊することになる、と書いていて、スミスの考えの基本に変わりはない。スミスのこの考えは、徳に向かう基本的な道が、自分以外の人間の判断にあるのではなくて、自分の中に住むと考えられた「公正な観察者」の判断に従うことにあるという考えを示している。

スミスによれば、ストア哲学者は自分を、自己愛がさし示すような、宇宙の他のものから切り離されて、それだけで生きているものではなくて、神の眼に映るような、宇宙の一つの構成員にすぎず、宇宙の全体の都合に従って取り扱われて当然なものである、と考えている（1,4,3.p.134.）。人生のどんな状況もストア哲学者にとっては同じことであり、「人間の生活の中のあらゆる出来事を導く知恵に確信して、どのような運命が自分にふりかかっても、それを喜んでうけいれ、自分が宇宙のさまざまな部分のつながりと依存関係のすべてを知っておれば、それは自分から進んで求めた運命そのものだということを確信する。」（1,4,3.p.134.）

スミスはこのストア哲学を「その教えの大部分に対しては、人間の自然がとどけるところをまったく越えた完全な状態を目指すよう教えている、という名誉ある異議の外に、何の異議もありえない」（1,4,3.p.136.）哲学であると考えて、「道徳感情論」の他のところで、この哲学の考えと同じと考えられることを自分の考えとして書いており（e.g.「自分以外の人間が自分を見るだろうと自分で自覚している光の中で自分を見るとき、（すべての個人は）自分以外の人間にとって、自分は大勢の中の一人にすぎず、どの点から見てもその中の他の一人の人間よりすぐれてはいないということがわかる。」（2,2,2.p.182.）cf.1,4,1.p.97~98. 1,4,2.p.108~109. 4,1.p.350~351.）、ただ、観察者の心の自然で、普通の状態を少しでも変えなければ感情の一致がえられないほど激しい感情はすべて適切な感情でないと考え、弱い、不完全な人間には厳しすぎると考えていたようであって（6,2,1.p.433.）、ここには、人間の自己愛をも、創造主がつくられたものであるから適切などころがあるものとしてうけいれようとするスミスを見ることができる。

スミスは2版で、ストア哲学の目標である完全な自己抑制にたどりつこうとすることは、理に反したことで、役に立たないことでもない、神の知恵と正義に堅く信頼し、自分を神の手に完全にゆだねるという、一番強く、安全な土台の上に自分の幸福を置くことである（2版；3,2.）と書き加えている。

6版では、これらのストア哲学を評価した文章は削除されたけれども、次のような文章がつけ加えられた。「普通の正直な人間であれば誰でも、……一人の人間が別の人間から不正に何かを奪うこと、あるいは、別の人間の損失あるいは不利益によって自分の利益を不正に推し進めることは、死以上に、窮乏以上に、苦しみ以上に、自分の肉体や自分の外側の状況に影響を及ぼすことができるあらゆる不幸以上に、自然に反することである、というあの偉大なストア哲学者の原理が本当であることを心の中で感ずる。」（6版；3,3.p.195.）ストア哲学者は「自分の信条を自然で、適切な正しい基準を大きく越えておしひろげた」（6版；3,3.p.196.）けれども、それは自分の肉親やごく親しい人間の不幸の場合であって、自分自身の不幸の場合にはストア哲学者の考え

は、まず適切である(6版;3,3. pp. 199~201.)。また、ストア哲学者が、人間の幸福はどんな状況でも同じことだ、と言うのは言いすぎだろうけれども、しかし、人間は結局「公正な観察者」の眼で自分を見て、自然で普通の落ち着いた状態にたどりつくから、「一つの永続する状況と別の永続する状況との間に、本当の幸福について、本質的なちがいはない」(6版;3,3. p. 209.) ということはまず正しい(6版;3,3. pp. 208~210.)。

また、ストア哲学者は一般に、不完全な徳がありうることをも認めているということをも認めた(6版;7,2, I. p. 426.) スミスは、ストア哲学者が人間の自己愛をすべて根絶やしにすることによって、人間にふさわしい仕事に対して人間を無関心にし、神のことを考えることを人間の大きな仕事にしたとストア哲学者を批判している(6版;7,2, I. pp. 426~428.)。

こうして、ストア哲学者の考えは基本的なところで正しいというスミスの考えは、初版から6版まで変わっていない。変わったことは、スミスの眼が更に具体的になったことであり、そのことによって、ストア哲学者の厳しい倫理が現実の人間にそぐわないところがあるということをも具体的に示したことである。

富と権力を追い求める自己愛は正義にかなうかぎり人間に許されると考えたスミスは、それが結果として、社会を支え、繁栄させることをも見た。

「富ある者、権力ある者が抱くあらゆる情念についてゆこうとする、人間のこの傾向を基にして、身分の区別と社会の秩序とがうまれてくる。」(1,4,2. p. 114.) し、人間が富と権力を自分の幸福への手段と考えて追い求めることが、人間の勤勉さ industry を絶えず働かせて、「人間に土地を耕やさせ、家を建てさせ、都市や共同社会をつくらせ、人間の生活を崇高なもの、美しいものにする学問や人間わざのすべてをつくらせ、さらによいものにさせ、地球の全表面を完全に変え、人間の手がまだ触れたことのない自然のままの森林を心地よい肥沃な平野に変え、未踏、不毛の大海原を新しい生活資源に、そして地球上のさまざまな国へのコミュニケーションの大幹線にした。」(4,1. pp. 348~349.) 富ある者が人間のこの勤勉の結果を独占しようとしても、自分で消費できるものには限りがあり、結局、さまざまな交換を通して生活の必需品はどの人間にもほぼ平等に行きわたり、人間は意図せず、知らないけれども、それぞれが自分の利益を追い求める中で、目に見えない手 an invisible hand に導かれて、結果として社会の利益を推し進め、人類の繁栄への手段をつくりだすことになる(4,1. pp. 349~350.)。

政治を完成し、商業や製造業をひろげるといった、社会の幸福を推し進めるさまざまな働きを人間にさせるものも、同じように、それによって利益をうける人間への共感ではなくて、そこにうみだされる制度をより完全で美しいものにしようとする心であることが多い(4,1. pp. 351~352.)。だから、人間の勤勉さを目覚めさせ、社会に尽す徳を植えつけようと思えば、その究極の目的である人間の幸福を説くよりは、そこにうみだされる制度のそれぞれの部分の間のつながり、依存関係を説明し、どうすればこの制度が完全な形で動くようになるかを説く方が効果が大きい(4,1. pp. 353~354.)。「政治の研究、さまざまな市民政府の制度、それらの長所と短所の研

究、われわれ自身の国の体質、外国との関係でのその立場や利害、その商業、その防衛、それが苦しんでいる不利な状況、それがさらされるかもしれない危険、前者を除き、後者を防ぐ仕方の研究ほど、社会に尽す精神を励ますのに役立つものはない。」(4, 1. p. 355.) だから政治の研究は、正しい、理性にかなった、実行できるものであれば、人間の頭を使った仕事の中で一番役に立つ仕事であるし、一番悪いものでも社会に尽そうとする情熱に生命を与えるものである(4, 1. p. 355.) とスミスは書いている。

しかし、6版で、制度を制度として完全なものにしようとする制度の人間 the man of system と、やさしさと積極的な愛に支えられ、自分と同じ市民が受けている不自由と苦しみへの現実の共感に支えられた社会に尽す精神 public spirit の人間とをつきあわせたスミスが、やさしさと積極的な愛に動かされる人間は、たとえ偏見であり不自由であっても、理性と説得によって動かせないものを力づくで動かそうとはせずに、できるところで最善のものをうみだそうとするのに対して、制度の人間は、人間をチェス盤の上の駒のように考えて、人間は法律や力で動かそうとしても動かない、独自の運動の原理を持っていることを考えないと書き、完全な政策や法律を考えることは政治家に必要なだけども、それをあらゆる反対を押しきって、すべてをすぐに現実のものにしようとするのは、自分の判断を善悪の最高の基準だと考え、自分以外のすべての人間は自分に従うべきだと考えることで、最高の傲慢であると書く(6版; 6, 2, 2. pp. 341~343.) とき、具体的でさまざまな現実の人間への共感と愛に支えられていない制度の改革は、人間を傷つけやがめて人間の幸福をうみださないものであることをスミスが見たことを示しており、その底に、最後に生かされなければならないものは、どんな人間であっても、現実生きて、生活している一人一人の人間であるというスミスの変わらない信条を見ることができる。

V

人間が共感とよき意図と自己抑制とを働かせて一人のコミュニケーションの主体として独立するときのかなめは、自分以外の人間とのコミュニケーションを通して、その人間の中に「公正な観察者」が生まれくることである。「ある人間が、一人だけのところで、同類である人間と何のコミュニケーションもなしに成人することができると仮定すれば、その人間は、自分の性格、自分の感情や行為の適切さや悪いところ、自分の心の美しさや醜さについて、自分の顔の美しさや醜さについてと同じく、何も考えることができないであろう。……その人間を社会の中に連れてくればすぐに、前には持っていなかった鏡を持つことになる。」(3, 2. pp. 254~255.)

人間は自分以外の人間からよしとされ、よくないとされない、ということだけでは満足せずに、自分がよしとされるにふさわしく、よくないとされるにふさわしくないものであることを自分で確信しているときに、本当に自分に満足し、心の落ち着きを持つものであるから、最初自分以外の人間の判断に動かされる人間は、やがて自分を公正な観察者としての自分以外の人間の位置に置いて、自分がその観察者としての自分にとってどのように見えるかを知ろうとする(3, 1. pp.

245～253. 3, 2. pp. 255～256.)。利害が対立する、あるいは対立しない二人の間でおこると同じことが、一人の間の中で、原始的な本来の自分、即ち当事者としての自分と、公正な観察者としての自分との間でおこり、自分を観察者としての自分がよしとすれば、人間は満足して落ち着き、自分以外の人間の判断に動かされなくなり、よくないとすれば、人間は苦しみ、動揺する(3, 2. pp. 259～260.)。「公正な観察者」が人間の中に生まれるということは、社会の中で生きるものとしてつくられた人間には、自然なことである(cf. 6, 1. pp. 413～414. 小論Ⅱ)。

スミスは2版で、人間が自分自身を判断するものとして「公正な観察者」を自分の心の中に立てるのは、重要な利害がからむ事柄を扱うときには、すべての人間の共感を得ることはできないということを経験を通して知るときである、と書き加えている(2版; 3, 2.)。この箇所は6版で削除されたけれども、6版では、自分を判断するものとしての、自分以外の人間と「公正な観察者」とがたがいに別の、独立したものであるということが更に明確にされた(6版; 3, 2. p. 166. pp 185～186.)ということを考えれば、この事実は6版で更に深められたと考えることができる。

スミスは2版で更に、いつも自分の利益だけを追い求めて「あさましく、利己的な」自己愛という「受動的な感情」と、自己愛を抑えて自分以外の人間のより大きな利益のために自分の利益を犠牲にさせる「寛容で、崇高な」「能動的な力」とを対比させて(2版; 3, 2. この対比は初版で「人間の幸福は、その受動的な感覚の心地よきにあるだけでなく、その能動的な働きの適切さにもあるにちがいない。」(6, 2, 2. p. 454.)と Plato, Aristotle, Zeno の考えを述べたところにあった)、自己愛に抗して人間に能動的な力を働かせることができるのは、隣人への愛、人間への愛ではなくて、それよりも強い力であり、自分は「大勢の中の一人にすぎず、どの点から見ても、その中の他の一人の人間よりすぐれてはいない」(2版; 3, 2.) ことを人間に教える「公正な観察者」「理性、原理、良心、胸に住む人、内なる人、われわれの行為の偉大な裁き人、裁決者」(2版; 3, 2.) であると書き加えている。これは「公正な観察者」が、公正な判断をするだけのものではなくて、その判断に従って、人間に自分の自己愛を抑えて適切な行為を行なわせるかなめのものであることを示している。

スミスが「公正な観察者」を、「自分の行為にまつわるすべての事情が知られたときの、自分以外の人間の感情」(3, 2. p. 257. cf. 6, 2, 4. p. 480.)をもつ公正な判断者と考えただけでなく、その人間の体験の中から行為の一般原則をうちたて、共感やよき意図や自己抑制を働かせて自己愛を抑えることによって、その人間の「自由な行為に導きを与える」(3, 3. p. 283.) ものであり、神がそれぞれの人間の中に、それら人間の間でのコミュニケーションを通して立てた「神の代理者 vicegerents of God or the Deity」(3, 3. p. 283. これは本来「教皇」を指す言葉) であるという考えに共感するとき、それは、人間の無意識のところに関与する神の力に支えられたものとしての人間の働きであると考えることができる。2版では「公正な観察者」の呼び名の中に substitute of the Deity が加えられている(2版; 3, 2.)、この箇所は6版で削除されたけれども、6版で新しく書き加えられた次のところは、スミスの考えが基本的に変わっていないことを示している。

自分以外の人間に共感されたいという欲求は、人間に徳を装わせ、悪徳を隠させて、社会にふさわしいものであると見せかけることを求めさせる、人間からうまれた死ぬべき定めを持つ欲求であるけれども、共感をうけるにふさわしいものでありたいという欲求は、人間に徳を本当に愛させ、悪徳を本当に嫌わせて、本当に社会にふさわしいものになることを求めさせる、神からうまれた不滅の欲求である（6版；3, 2. pp. 170～171. p. 187.）。人間を社会にふさわしいものにつくられた創造主は、この二つの欲求を人間に与えられて、前者の欲求に基づいて、自分以外の人間を人間の第一の裁き手とされ、後者の欲求に基づいて、「人間の中に住むと考えられた、公正で事情をよく知った観察者 the supposed impartial and well-informed spectator」（6版；3, 2. p. 185.）をより権威ある第二の裁き手とされた。しかし、「公正な観察者」は「半神半人 demigod」（6版；3, 2. p. 187.）で、神の力に支えられているけれども人間の働きであるために、自分以外の人間からいわれない非難をうけたときなどには、自分の本来の欲求には従わずに自分以外の人間の判断に支配されてその確信をゆるがされる。こうして「公正な観察者」が崩れるとき、人間が訴えることのできる最後の裁き手は「すべてを見通しておられるこの世の裁き手」（6版；3, 2. p. 187.）であって、人間は最後にはこの世の創造主に対する絶対の信頼に支えられることによって、自分の弱さにもかかわらず、一人の人間として冷静に立つことができる（6版；3, 2. pp. 187～188.）。

「公正な観察者」が、自分以外の人間の判断に動かされて、自分の判断を崩すことがあるということは、それが神と結びついたものであるにもかかわらず、人間の中に絶対に正しいものがあることもないという体験と結びついていると考えられ、「公正な観察者」の内容は6版で更に具体的なものとして明確にされたと考えられる。

だからスミスは「人間は、神と自分の同類である人間とに対して責任がある。しかし、人間は基本的には神に対して責任があるということに疑いはないけれども、時間の順序からは、神、あるいは、その神が人間の行為を裁くときの原則に思いあたることのできるには、その前にどうしても自分を、自分の同類である人間に対して責任あるものと考えなければならない。」（3, 2. pp. 257～258.）と書いている。「道徳的なもの a moral being とは、責任あるもの an accountable being である。責任あるものとは、その言葉が示しているように、自分の行為のことを自分以外の誰かに説明 account しなければならない、従って、この自分以外の誰かの好むところに従ってそれを規制しなければならないものである。」（3, 2. p. 257. 6版でこれらの箇所が削除されたのは、そこで「公正な観察者」と創造主とのちがいが明確にされたからだと考えられる）自分以外の人間とのコミュニケーションを通して一人の人間の中に「公正な観察者」がうまれるとき、その人間の中にその人間と神とのコミュニケーションが開かれたのであり、そのコミュニケーションはそのときから、その人間が自分以外の人間と一人の人間としてコミュニケーションを交わすその一番底でいつもその人間を一人の人間であるように支えるコミュニケーションとして働くことになる。

しかし、「公正な観察者」が自分の感情によって判断するだけであれば、人間の自然な感情の強さは「公正な観察者」を圧倒しやすい。特に、自分の利害にかかわる感情に引きずられてある

行為をしようとする、公正な判断が一番必要なときに、人間は「公正な観察者」の眼で自分を見ることはまずできない。より冷静に自分を見ることができると、行為のあとでさえ、自分を悪いと思うことは不愉快であるから、そのように考えさせるものからは、わざと目をそむけることが多い(3,2, pp. 261~264. cf. 2,2,3. p. 191. 6,2,3. p. 465.)。

人間が自分の行為を、自分の利害から離れて冷静に見ないという「この自己欺瞞 self-deceit, 人間のこの致命的な弱さは、人間の生活の混乱の半ばの源である。」(3,2. p. 264. cf. 小論 IV) 人間が自分を「公正な観察者」の眼で見ることができれば「改革は一般に避けられないであろう。そうでなければ、われわれはその光景に耐えられないであろう。」(3,2. p. 265.) けれども、人間のこの弱さを救うものとして、神は、人間が自分以外の人間の行為をたえず観察する中から「個々の場合に、われわれの道徳能力 moral faculties (「公正な観察者」) が、つまり、よいところがあり適切だということについてのわれわれの自然な感覚が、よしとし、よくないということについての体験に究極には基づいて」(3,2. p. 266.) 理性が帰納してつくりだされてくる「何を行ない、何を行なわないでおくことがふさわしく、適切であるかということについての一般原則 general rules」(3,2. p. 265. cf. 1,2,2. pp. 24~26. 6,3,2. pp. 501~503.) と、自分の行為をこの一般原則に従って行なおうとする義務感(3,3. p. 273.) と、その行為を現実に行なうときに必要な自己抑制とを人間に与えられている、とスミスは考えていた(cf. 6版; 6,3. p. 349.)。

しかし同時に、「義務感がわれわれの行為のただ一つの原動力でなければならないということは、どこを探してもキリスト教の教えではない。そうではなくて、哲学が、また事実、コモン・センスが指し示しているように、義務感がわれわれの行為を導き支配する原動力でなければならないということが、キリスト教の教えである。」(3,4. p. 298.) し、徳は、自然な感情を完全に根絶やしにし、絶滅するものではなくて、自然な感情の激しさを、個人を傷つけない程度に、社会をかき乱さない程度に抑えるものであるとスミスは考えていた(6,2,4. pp. 484~486.)。

義務感とともに、人間の自然な感情が働かなければならないけれども、具体的にはスミスは、非社会的な感情は主に義務感に導かれなければならないし、社会的な感情は主に人間の自然な感情に導かれなければならない(自愛感情はその中間)、正義以外の徳は、どんな場合にも従わなければならない厳密な原則をつくることはできないから、主に自然な感情に導かれ「公正な観察者」の判断に従わなければならないし、正義だけは、どんな場合にも従わなければならない厳密な原則をつくることのできるから、主に義務感に導かれなければならない、と考えていた(3,4. pp. 297~316. 6版; 6,2,1. p. 333.)。正義が自分の非社会的な感情の抑制であることを考えれば、行為の基準として基本的に一般原則に従わなければならないのは、結局は正義にかかわる場合だけである。

この一般原則の基に一人の人間の感情の体験があるということは、スミスの Hobbes への批判と結びついている。教会の権力の不従順と野心が社会の無秩序の源の中心であると考えた Hobbes にとって、自然状態は戦争状態であり、市民政府がつくられる以前に安全で平和な社会はありえないから、社会を生かしつづけるということは市民政府を生かしつづけるということである。

あり、その最高の長に従うということであって、市民政府の最高の長が定めて、行なう法はその内容が何であっても、正しいこと、正しくないことのため一つの究極の基準とされるべきであった（6,3,2. pp. 498～499.）。そうして「人間の良心を教会の権力ではなくて、直接に市民社会の権力に従わせようとした」（6,3,2. p. 499.）Hobbes に対して、スミスは「あらゆる法や現実の制度に先立って、（人間の）心は、ある行為や感情の中に、正しい、誉めるべき、徳の高いといった性質を、別の行為や感情の中に、悪い、非難すべき、不道德なといった性質を見分ける能力を自然によって与えられて」（6,3,2. p. 500.）いると考えている。人間が最後に従うものは、社会が権力を背景に正しい法として与えるものではなくて、それぞれの人間が自分の体験の中で動かすことのできないものとしてつかみとった人間の事実である。「道徳感情論」は、法律の力で動かすことができない、それとは別のところに基盤を持つ、そのような人間の自然の事実を明らかにしようとしたものである（2,2,1. pp. 175～178. cf. 6版；6,2,2. pp. 341～343.）。

その上、正義なしにはどんな社会でも生きつづけることができないから、現実の社会の法は自然の正義の法とほぼ一致し、「実定法の体系はすべて、自然法 *natural jurisprudence* の体系への、あるいは、個々の正義の原則を数えあげることへの、多かれ少なかれ不完全な試みと見ることができる。」（6,4. p. 547.）けれども、実定法は自然な正義感が示す原則と完全に一致するものではなくて、「あるときはいわゆる国家の体質、即ち、政府の利害が、あるときは政府を専制支配している特定の階級の人々の利害が、その国の実定法を、自然の正義が定めるであろうところから曲げている。」（6,4. p. 548.）6版では、国と国との間の法律は、更に正義の原則に反していることが多く、守られないことが多いことが書き加えられている（6版；3,3. pp. 217～218.）。

「行為のこの一般原則は、たえず反省を繰り返すことによって、われわれの心の中に定着してしまったならば、自分が置かれた特殊な状況の中で何を行なうのがふさわしく適切であるかについての、自己愛の誤りを正すのに大いに役に立つ。」（3,2. p. 269.）自己愛に支配された人間の感情と、一般原則に従おうとする人間との間のたたかいは激しい。しかし、どんな状況にも最大の適切さを持って行為できるようにはつくられていない大多数の人間にとって、一般原則をつくりだしてそれに従うということは、最上のものをうみださないとしても、正義を軸とした人間の義務の本質的なものを人間に忘れないようにさせ、スミスの場合に基本的なことである、人間としてできるところで信頼のできる人間をうみだして、人間が社会をつくって生きてゆくのを支えている（3,3. pp. 275～276. p. 278.）。

VI

人間は、完全なものを基準にすれば、弱く不完全なものであり（1,2,4. p. 47. 2,1,5. p. 167. 6版；6,3. pp. 362～363.）、この世は悲惨と墮落の世である（1,4,1. p. 98.）、とスミスは考えている。現実には罪あることをしていなくても、他の人間から罪あるとされれば、人間は「自分の性格が自分を守るに十分でないと感ずる。」（6版；3,2. p. 178.）

しかし、人間に普通のを基準にすれば、大部分の人間はこの基準にかなうものである(1, 2, 4, p. 47.)。この地球全体を見れば、苦しんでいる人間よりも幸福な人間、少なくとも耐えられる状況にある人間が多いし(1, 4, 1, pp. 97~98. 2版; 3, 2.), 積極的な愛はそれが必要で役に立つところでは強く働いている(6版; 6, 2, *Introduction*. p. 320.)とスミスは考えている。

人間は自分を判断するとき、この二つの基準の両方に気をつける(6版; 6, 3, pp. 362~363.)けれども、スミスは、積極的な愛をただ一つの行為の原理とされていると考えられる神は、この世のすべてのものを自分の眼によきようにつくられたのであり、一目見ただけでは不条理と見えるところにも、その底には神のよき意図が働いている(2, 3, 3, p. 240.)と考えて、この世の悲惨と墮落にもかかわらず、この世のすべてをつくり、それ故にこの世のすべてを知り尽して、この世を導いておられる創造主を堅く信頼していた(cf. 6版; 6, 2, 3, pp. 345~346.)。

「自分の自然な感情に尋ねてみるならば、神の神聖さを前にしては、人間の弱い不完全な徳がよい報いをうけるにふさわしいなどと思える以上に、悪徳が罰をうけるにふさわしいと思えるのではないかと、われわれは恐れがちである。人間は、限りない完全さを持つ者の前に出ようとしているときには、自分のよいところ、自分の行為の不完全な適切さに、信頼感を持つことはまずできない。自分の同類である、人間の前では、自分を高めて当然であることが多く、同類の人間の更に大きな不完全さと比べたときには、自分の性格や行為を高く評価して当然な根拠のあることが多いかもしれない。しかし、自分の限りない創造主の前に出ようとしているとき、事態は全く別である。そのようなかたの眼に、自分の小ささ、弱さが尊敬やよい報いにふさわしい対象であると見えるなどと考えることはまずできない。そうではなくて、自分はこれまでに数えきれないほど義務を侵しているために、嫌悪と罰にふさわしい対象になる、ということは簡単に考えられる。また、自分がそう見えるにちがいないと自分で感ずることができる、こんなに卑しい虫けらの上に、神の憤りが何の遠慮もなく解き放たれないわけをどこにも見ることはできない。それでも人間が幸福を望むとすれば、神の正義からそれを要求することはできなくて、神のあわれみからそれを希わなければならないということに気がつく。自分のこれまでの行為を考えて、悔い、悲しみ、屈辱をうけ、心を碎かれるということは、このために、人間にふさわしい感情であり、自分が呼びおこしたのは当然だと自分で知っているあの怒りを和らげるために自分に残されているただ一つの手段であるように思える。人間はこうしたことすべてにその目的をもたらす力があるかどうかを疑いさえする。そして、神の知恵は、人間の弱さのように、罪人の一番執拗な嘆き哀しみによっても、その罪が赦されるよう説きふせられるということはないのではないか、と恐れるのが自然である。何か別のとりなし、何か別の犠牲、何か別のあがないが、人間一人にできることを越えて人間のためにされているのでなければ、神の正義の純粹さが人間のさまざまな罪と和解させられることはない、と人間は考える。啓示の教えは、自然がこうして根源的なこととして予期させていることと、あらゆる点で一致する。その教えは、われわれが自分の徳の不完全さに頼ることができないということをわれわれに教えると同時に、一番力強いとりなしがさ

れたのであり、われわれがさまざまに掟を越え、よこしまであったことに対して一番恐ろしいあがないが支払われたのだということをわれわれに示している。」(2,2,3. pp. 204~206.)

キリスト教の教えが創造主のつくられた自然と一致しているということを記したと考えられるこの一節は、6版で削除されたけれども、人間の弱さ不完全さに触れたこれ以外の箇所はそのまま残されており、神の前での人間の不完全さの同じ自覚が、賢明で徳の高い人間にあることが書き加えられ(6版; 6,3. pp. 363~364.), 年老いた人間は「この世の愚かさ」と不正との長い体験」(6版; 3,3. pp. 202~203.)を持つということが書き加えられ、「公正な観察者」について更に明確にされたということを考えれば、スミスがここで取り除こうとしたのは、キリストによるあがないにかかわるところだけであり、それはスミスが既成のキリスト教への批判を次第に強めていったことと結びついていたことと考えられ、人間が不完全なものであるというスミスの自覚はここで更に強められ、それにもかかわらずこの世を支えている創造主への信頼は深められたと考えられる。

偶然の影響が働いて人間の行為の意図と結果とがくいちがうとき、本来はその行為の評価に結果の影響は入るべきでないし、それが入れば徳に水をさすことになるけれども、現実にはそれが働いているということが、よく見れば、結果として人間の幸福をうみだすものである(2,3,3. p. 238.)し、人間が神にだまされて富と権力を追い求めるということが、結果として社会の利益を推し進め、社会の繁栄をもたらす(4,1. pp. 348~350.)ということのスミスは見ている。

この世にあるものは、みな神が創造されたものであるから、この世で生きてよいものとして、スミスはできるかぎりそれらを生かそうとした。「自然は、しかしながら、人間の今の墮落した状態の中でさえ、全く、そして、あらゆる点で悪い、あるいは、どんな程度、どんな方向のものでも、ほめて、よしとするに適切なものでありえないような、何かの原動力をわれわれに与えたほど、われわれに不親切であったとは思えない。」(2,1,5. p. 167.)とスミスは書いている。

人間の自然な感情を完全に根絶やしにし、絶滅するところに徳があるだけと考えるのであれば、そういう徳は現実の人間にはありえないのであるから、徳は現実にはないということになる。この考えを前提にしたときに生まれると考えられる、人間の行為はすべて利己的な動機だけから生まれるのであって、徳と悪徳との間に質のちがいはないという Mandeville らの考えにスミスは強い反感を持った(6,2,4. pp. 474~476. pp. 482~483. pp. 485~486.)。徳と悪徳との間に区別をつけて、徳を立てるということは、人間が一人の人間として立つということと考えられるから、その区別がありえないということは、一人の人間が一人の人間として独立することがありえない、ということである。しかし、それにもかかわらず、スミスは Mandeville らの考えがあるところで人間の現実に触れていることを認めている(6,2,4. p. 474. pp. 487~489.)。

人間が意図せずに誤って自分以外の人間を傷つけたときに、傷つけた人間と、傷つけられた人間との双方が共に立つことができるという事実をスミスは探り出そうとしている。傷つけた人間は現実に罰をうけ、しかし、創造主への堅い信頼に支えられて慰めを与えられる(2,3,3. pp. 242

～244. cf. 6版；7, 2, 1. p. 427.)。

生き物の世界では、個を支え、栄えさせ、種(社会)を支え、栄えさせることが、神の二つの大きな目的であって、すべての生き物は、この目的への欲求とともに、この目的をうみだす手段への欲求を直接の本能として与えられている(2, 1, 5. p. 168. 2, 2, 3. pp. 191～192. cf. 3, 3. p. 290.)とスミスには思えた。社会の中でしか生きることができない人間にとって、個人の存在は社会の存在と結びつき、個人の利益は社会の繁栄と結びついている(2, 2, 3. p. 194.)から、スミスは、一人の人間の維持と多数の人間の安全とが一致しないときには、多数の人間の安全をとるのが正しいとさえ考える(2, 2, 3. p. 200.)。しかし、それは人間の自然な感情に反したところがあるとスミスは考えている(2, 2, 3. pp. 200～202.)。そして「……個に対するわれわれの配慮が多数に対するわれわれの配慮からうまれるのではなくて、……多数に対するわれわれの配慮が、その多数をつくっているさまざまな個に対してわれわれが感ずる、個々の配慮から積み重ねられ、つくりあげられるのである。」(2, 2, 3. p. 198.)

個の維持と社会の維持とは現実には必ずしも一致していないので、そのためにいわれない苦しみを受けた人間は、「公正な観察者」さえ自分の中から追い出されて、絶望にたたきこまれる。

「各人はなす如く、なさるべし。報復は、自然がわれわれに指し示している偉大な法であると思われる。」(2, 2, 1. p. 179.) 積極的な愛には積極的な愛が、不正を行なう者には同じ不正が、正義を行なうだけの者には同じ正義が返されるべきである、と人間は思うようにつくられている。しかし、現実には、この人間が思うところを越えて、厳しい事実が人間を打つことがある(cf. 3, 3. p. 291.)。「こうして地上に不正の勝利をくいとめることができる。どんな力も見つけ出せずに絶望するとき、自然にわれわれは天に訴えてこう望むのである。われわれの自然をつくられた偉大な創造主は、われわれの行為を導くために創造主がわれわれに与えられたすべての原則にうながされて、われわれがちょうどここでやろうとしていることを、来世には御自身でやられるであろうと。創造主は、われわれにはじめるよう御自身でこうして教えられた計画を仕上げられるであろうと。そして来たるべき世には、それぞれの人間に、この世でなしとげた事に応じて報いられるであろうと。こうしてわれわれは未来の国を信ずるようになるのであり、それは、人間の自然の、弱さや、望みや恐れからだけでなく、人間の自然にある一番気高く、一番すぐれた力、徳への愛と、悪徳と不正への憎悪からでもある。」(3, 3. pp. 292～293. cf. 1, 4, 3. pp. 139～140. 6, 2, 4. p. 482.)

この世に正義が貫くとは信じられなくなって、絶望と頽廢の中に崩れようとする人間を、神は、この世のすべてをつくり、それ故にこの世のすべてを知り尽して、すべてのところで働いているものとして、支えるのである。それは自分がこれまで正しいと考えていたことが本当は間違いであったと知ることではない。人間にはどう考えても正しいとしか考えようのないことが現実の中で完全につぶされることによって、そうなることを神が求められたということを知ることによって、人間は人間というものの小ささを知り、人間のおもいのすべてを越えてこの世を動かされている神の力のゆるぎないことを知り、人間のそのような小ささにもかかわらずなおこの世で

生きてゆく生命が神によって自分に残されていることを知るのである。

人間は、神へのこの堅い信頼に支えられることによって、苦しみの中で「公正な観察者」をとりもどし、一人コミュニケーションの主体として立ち、創造主がつくられたこの世のすべてのものを自分にできるかぎりで生かしながら生きてゆくことができる。

初版ではこれを自分に共感できる考えとして書いたスミスが、6版では同じことを自分の考えとして書き、「公正な観察者」が崩れたときになお崩れない創造主への信頼が、人間に最後のなぐさめをもたらすと書いた（6版；3,2. pp.187～188.）ことと、6版で自己抑制の難かしさ（cf. 小論 IV, V）と自己抑制の重要さ（6版；6, Conclusion. pp.385～388.）とがともに強調されたこととは、その間にスミスの中で、社会と個人との間にある裂け目が深まり、同時に、その裂け目をつなぐ根源である創造主への信頼が深まったことを示している。

初版で、間違っただけを神の命ずる正しいことと考える誤った宗教の持主は、憎しみや怒りの対象であるよりは、哀れみの対象であるとして書いた（3,4. pp.311～315.）スミスは、6版で、神に自分の偏見を押しつけて、党派的な神をつくる党派の人間の狂信は、道徳感情を腐敗させる最大のものであることを書き加えている（6版；3,3. pp.219～220.）。世の人 the man of the world（3,3. p.296. cf. 「おのがうくべきものをこの世にてうけし…世人」〔詩篇 17,14.〕）は、自分以外の人間と自分の中に住む「公正な観察者」に心を向けるだけであるけれども、この世とはちがうところに最後のよりどころを置いている人間は、それに加えていつも神の前で行為しているのであり、宗教の自然な原動力が党派的な熱心さに汚され、人間としてなすべきことよりも、つまらぬ儀式を行なうことが第一の義務とされているということのないところでは、人間に置くことができる最大の信頼を置くことができる人間をうみだすとスミスは考えている（3,3. pp.295～296.）。既成のキリスト教から次第に離れていったスミスを最後のところで支えていたものは、営々とこの世の仕事を営みつつけているどの人間の中にもたえず新しく働きかけてくれる神の力であったと考えられる。

VII

このようにして生まれくるコミュニケーションの主体を前にするとき、「自然は、よしとし、よくないとするわれわれの感情を、個人と社会との両方にとって都合のよいことに非常にうまくあわせたように思える」（4,2. p.359.）ので、人間にとって役に立つものは人間がよしとするものであるように見え、また、役に立つ行為や感情は、それが役に立つという意識によって新しい美しさを持ち、そのことによって、われわれがそれをよしとする傾向を更に強めるということはあるとしても、役に立つということが多くの人間の自然な感情にその行為を最初によしとさせるものではない（4,2. p.368.）し、また、慣習や流行は、美しさについての感情に影響を与えることが大きいけれども、「道徳的によしとし、よくないとする感情は、人間の自然の中で一番強い、一番生命力にあふれた情念に基づいていて、それは（慣習や流行によって）多少曲げられることはあっても、完全に歪められることはありえない。」（5,2. p.387.）とスミスは考えている。（未完）